慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リカァドオ派社会主義概論（上）
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.2 (1924. 2) ,p.259(105)- 286(132)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240217-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『其は悅樂を以つて爲されしや』と云ふ問はあらゆる裝飾に關する正しき問である、困難なる仕事にも製作者の悅びがなければならない、然らざれば生氣あるものは得られないであらう製作者の幸福其は絕對的の條件である。更に

『吾々は特殊の性質の奢侈又は生活の普通設備に就いてそが勞働者又は從者に與ふる仕事が、然らざれば吾人に彼等に與へう可き仕事と同じく健全にして且つ適せるものなりや否やを檢するの風習を持つ事ない。人々絕對的生活必需品を與ふる丈けでは充分でない、吾人は吾々の要求が必然さする所の生活方式について考へねばならぬ。而して出來うる限り吾人の必要をして、是等の供給に於いて貧者を養ふと共に更に彼等を向上せしむるものたらしむ可く力めなければならぬ。彼等の仕事以上に人を敎ふる事よりも人以上の仕事を與ふる事が遙かに意義ある事である』と

此の後年オクスフォード講義の中に述べられた所說の基礎は既にこゝに形成せられてゐたのである。

かくてラスキンは藝術を見美術をみて同時に製作者を見るのである。美術の世界に入つた彼は更に人間の世界に入るのである。斯くして彼は後の社會改造論者に少なからざる暗示を與へたのである。然かも彼が全然此の新しき世界に沒入する迄には更に十餘年を待たねばならぬ。其の間に「七燈」の所說を發展せしめた『ヴェニスの石』と『近世畫家論』殘卷三部との著述があり又多くの講演がある。故に此の十餘年は一時に飛躍して一八六〇年に迫るべく傳記々者の省筆を許さゞる所のものであらう。

（此稿完）

リカアドオ派社會主義概論（上）

津田誠一

一

假令アントン・メンガアが其名著「勞働全收權」の自序に開陳せる、「余は本書に於てマルクス及ロードベルツスが、其學說の最も緊要なるものを何等の典據を表示せずして、英吉利並に佛蘭西の理論家より借用し來れる經緯を闡明す可し。洵に余は衆人が隨喜して以て科學的社會主義の創造者なりと看做せるマルクス及ロードベルツスが事實其幽玄に於ても其完璧に於ても、遙に彼等の先驅者に凌駕せらるゝ所以を斷言するに躊躇せず」（Anton Menger: The Right to the Whole Produce of Labour, trans. by Tanner, p. cxv）との見解は、矯激遽に左袒す可からずと雖然も社會主義が奔放なる空想の所產たる無何有鄕の憧憬より蟬脫して、整然たる理論學說の上に其體系を樹立するに至れる推移は、決して虛空の一躍に依り旦夕の間に顯現せるにあらず、幾多先覺の眞摯なる思索の集積より自然に展開し來れるは、否むを得ざる事實である。爰に所謂リカアドオ派社會主義の人々も亦た、如上の意義に於て社會思想の發達史上に、看過す可からざる貢獻を寄與せるものである。

產業革命と奈翁戰爭の複合的影響を、同一期間に經驗せる大英國民は、美事社會的動搖の試錬に堪へて、近代文化の魁をなした。結社禁止法の撤回、議院改革法案の制定、救貧法の改正、穀物條例の廢除、印紙條例の排斥、公敎育の擴張、郵稅低下の促進、工場獄舍改善の考究、吾人は前世紀の前半に於て彼等が頻々革新に急なりし

を見る。而して時勢に順應するも時勢に反撥するも、思想は畢竟環境の反映なるを知らば、此新生の機運に乘じて資本主義經濟學が愈々完成の境地に達し、政治的急進派の自由政策に有力なる聲援を送れる一方、社會主義思想も亦た既往の空中樓閣を出でゝ、其主張に合理的根底を與ふ可く努力するに至れるは、固より怪しむを用ゐない。Comte は「吾等の問題を暗示するものは心の任にして、之を解決するは智の任である：：智の第一に居るに適する位置は、社會的同情の婢僕たること是である」（小泉教授譯語）と云へるが、此時に當つて社會思想は、將に先人の情熱に依り暗示せられたる問題に智的解決を與へ、以て社會的同情に訴へんとするに至りしものである。然も自己の經濟學を所有せざる彼等は、勢ひ既成の資本主義經濟學に其立論の基點を求め、就中リカアドオの價値學說に於て絕好の機緣を見出した。

既に所謂科學的社會主義創造の協翼者エンゲルスの自認せるが如くに、「諸他の傾向は姑く措き、近世社會主義は其資本主義經濟學より出立せる限りに於ては、殆ど專らリカアドオの價値學說に連繫せるものである。リカアドオが一八一七年其「經濟原論」の冒頭に披瀝せる二個の命題、即ち第一、各商品の價値は唯だ偏に其生產に要求せられたる勞働の分量に依り決定せらる。第二、社會的勞働總體の所產は、地主、資本家並に勞働者の三階級間に分割せらると云ふ命題は、夙に英國に於て社會主義的結論の材料となつた。是等の文獻は從來殆ど閑却せられしを、大部分マルクスが發見せるものなるが、這中如上の命題を演釋する事の極めて明晰深奧なる、「資本論」の出現以前には何物も是に優越する能はざりし程である」（Engels's Preface to Marx's "The Poverty of Philosophy," Kerr's ed. p. 11）。吾人は固より純眞一律の勞働價値說が、畢竟リカアドオの固執を斷念せる所たると共に、亦た決して前人未發の見解にもあらざる所以を屢々敎へられた。爰には唯だ一般にリカアドオが、該學說の代表的權威を以て看做さるゝと共に、其社會主義的應用に供せらるゝに當つて、彼れの修訂は默殺せられ、其原始的態樣のみか繼承せらるゝに至りしを述ぶれば足る。稱してリカアドオ派社會主義と呼ぶ所以、亦た實に爰に存するのである。

翻つて當時の反動思潮を檢するに、其傾向に於て二個に大別せられる。第一は個人主義的反動思想である。彼等は其非生產階級と思惟する資本家を糾彈するに於て、寸毫の假借する所無きも、一方社會主義に加擔するをも亦た潔しとせず、其實踐的要求としては資本主義以前の時代に復歸し、然もマーカンティリズムの羈絆無き社會を翹望するものである。換言すれば、彼等は何等の政府干涉無く專ら自然的なる交易の法則に支配せらるゝ所の、農工業の自由不羈小規模なる生產者より成れる、社會の實現を理想とするものである。第二は協同的共產思想である。彼等は資本主義並に國家干涉の有害なる結果に鑒慨する點に於ては、前者に背離する所無きも、勞働の不遇、國民の禍患を匡正する手段として、社會主義を勸說し、就中協同的共產社會の建設を謳歌するものである（Beer: History of British Socialism, vol. I. p. 183）。而してリカアドオ派社會主義の代表的人物を、其主なる傾向に從つて區分すれば後者に屬するものは William Thompson, John Gray, John Francis Bray 前者に屬するものは Thomas Hodgskin である。

協同的共産部落の創設に獻身的盡粹を致せるRobert Owen「最大多數の最大幸福」なる標語を掲げて、功利主義倫理を普遍化せるJeremy Bentham並に正統派經濟學を大成してDavid Ricardの三者三樣の特徴は、リカアドオ派社會主義の至上權威たるキリアム・トムソンに於て渾然合體せらるゝに至つた。トムソンの經歷は、William Pare及びJ. Minter Morganに依つて、極めて簡單なる記錄を存するに過ぎざるも、尙其風格の一端を窺知せしむるものがある。彼れは一七八三年前後Cork郡に出生、一八三三年同地Clonnkeenに逝く。面積千四百エーカアの土地を所有し、其"Labour Rewarded"の自序に依れば、約十二年間彼れは「他人の勞働の所産たる、所謂地代に依り生活」してゐた。彼れは一八三〇年遺言狀を作製して、其廣汎なる所有地を Owen 派の共産社會の建設に寄附す可き意向を表示したが、其親族の反對に依り死後其僅少の部分のみが、素志に從つて處分せられた。Minter Morganに依れば、トムソンは隱棲瞑想の士で「社交よりは寧ろ書齋に、讀書よりは寧ろ思索に、其日を送れる」人である。生來病弱、老後約十七年間禁酒菜食を嚴守した。トムソンの著作が單なる樂天思想以上のものを包有するは偶然でない。吾人は體質蒲柳情操多感、苦難を目擊し不正に想到する每に傷心制する能はず、遂に正義と福祉の「最大多量」を獲保す可き理想社會の案出に沒頭せる、此先覺の風貌を髣髴する事が出來る。

トムソンの著書總じて四部、其最初の且つ最も傑出せるものは一八二四年に上梓せる"Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth most conducive to Human Happiness"にして、序言に從へば、富の不平等は社會的に利益なりとの意見を有する同鄕一紳士への反駁として、既に一八二二年に脫稿せるものである。第二は"An appeal of one-half of the human race, Women, against the pretentions of the other half, Men, to retain them in political, and thence in civil and domestic slavery; in reply to a paragraph in Mr. (James) Mill's celebrated Article on Government," 1825なる一書で、J. S. Millの自叙傳中には本書に關說して、Owen宗の「代表的鬪士は余の熟知せる甚だ尊敬す可き人物Cork郡のキリアム・トムソン氏、即ち"Distribution of Wealth"並に余の父の"Essay on Government"中の所說に反對せる婦人の爲めの"Appeal"の著者であつた」(Mill: Autobiograph, N. Y. 1873, pp. 124-125)と云へる一節が有るが、然もMill自身が後年其"Subjection of Women"中に披瀝せる婦人論は、是と顯著なる近似を爲すに拘らず、何等前者に言及する所無きに徵すれば、其世人に與へたる印象の稀薄なりしは推量に難くない。第三は"Labour Rewarded. The Claims of Labour and Capital conciliated; or how to secure to labour the whole products of its exertions," 1827にして、公刊直接の動因はHodgskinの"Labour Defended"が個人主義的色彩濃厚に、又精神勞働を蔑視せるを非難するに在り、傍ら前著「"Distribution of Wealth"の要旨を一層周到且簡潔に再現せるもの、最後の小册は"Practical directions for the speedy and economical establishment of Communities on the Principles of Mutual Co-operations, United Possessions, and Equality of Exertions and of the means of enjoyment," 1830と銘し、協同的共産社會を樹立維持するに適當

なる諸般の組織劃策に關する提案有り、共產社會に加入するの自由は之を認容するの必要有るも、一旦其構成員に備はる以上は、自由は全然平等の爲に退讓す可き事、各員擔當の勞働は一般投票に依り選任せられたる行政官の手にて決定せらる可き事等の陳述を見る。乍併トムソンの理論學說の精髓は、擧げて "Distribution of Wealth" 中に包容せられ、且つ "Labour Rewarded" に於て補足せられてゐる (Esther Lowenthal: The Ricardian Socialists, pp. 15-18. & Palgrave: Dictionary of Political Economy, vol. III. pp. 536-537)。

三

正統派經濟學成立の動因が、人類福祉の爲の自由提唱に存せしは衆目の認むる所なれども、其亞流を汲める者に於ては、例へば Senior の如く、經濟學徒の關與する所は幸福にあらず富である。苟くも富に影響せざる考察は悉皆之を脫漏す可しとの見解が、漸次濃厚となるに至つた、トムソンの主著の標題は、斯くの如き傾向に對する反抗を明示してゐる。彼れ自身の言辭に徵すれば、彼れは「經濟學即ち單なる個人的競爭に基く富の生產にのみ關する科學が、須らく其道を讓らざる可からざる所の嶄新なる科學、換言すれば人類の幸福增進に關する科學」の樹立を企圖せるものである (Appeal of Women, p. xiv)。而して其所謂幸福に關する新科學に哲理的根柢を提供せるものは、Bentham 流の功利の原理に外ならぬ。彼れは Bentham を以て倫理哲學上の Francis Bacon なりと讃仰し、深く其學說に私淑せる結果、一八一八年前後に於ては、既に世人の耳目を聳動しつゝありたる Owen 主義を以て唯だ「進步せる救貧策」に過ぎず、之を社會全般に擴充適用せんと欲するは、失當の甚しきものと思惟せる程である。然るに爾來分配問題に關する不撓の研鑽は漸次其見解の變遷を助長し、遂に一八二二年其宿望たる Bentham 流の最大幸福の理想を、Owen 流の協同的共產社會の中に實現せんと庶幾するに至り、爰に精神生活上に於る顯然たる轉期を劃した。洵にトムソンの思索の過程は、一功利主義者が化して社會主義者となるの經緯を窺知せしむる點に於て、好個の典型を提示せるものである (Beer: History of British Socialism, vol. I. p. 219)。

彼れは先づ Bentham に倣ひ、幸福計量の基礎たる快苦の感情の測定には、當該感情の强度並に持續性を以て尺度と爲す可き事、及び各個人の感受性は平等なる可き事、或は寧ろ平等なりと認定するの外無き事を力說する。曰く「若し爰に人有りて、其身體の構造が同胞 ノ 夫れに比し遙に優秀なるの故に、殘餘の同族よりも無限に大なる幸福を經驗し得可き事を立證し得たりとせば、彼れの要求は、牡蠣に對する人間の要求の如くに、是認せねばならぬ。」換言すれば、感受性平等なるに於ては、富の分配も平等なる可きを至當とし、感受性不平等なるに於ては、富の分配も不平等なる可きを至當とする。然るに實際上「社會の凡ゆる成員は、不具畸形を除き、其身體の構造齊一なるが故に同一の待遇を以て是に臨めば、同一の幸福量を享受し得可き資格がある。」若し感受性の不平等が現存するとすれば、是れ現在の社會組織の下に於ては、各人に「同一の待遇」を與へし事無く、又與ふる能はざる爲である。假に各人の幸福感受に關する資格に於て、根絕し難き差違有りとするも、若し吾人にして其那邊に存し且つ幾許の比率に於て存するかを立證し能はざる時は、何等實用に供す

るを得ない――感受性の不平等なる事實と、此不平等の程度を測定し、以て富分配の基礎たらしむる可能性とは、夫々別個の事柄である。」且つ夫れ斯かる差違を測定す可き方途有りとするも、尙測定の公平を保持するには「克服し難き實踐上の困難」を隨伴す可く、測定の公平を獲保し得たりとするも「傷害、疾病、星霜の推移」は、或る一年に於る感受性の測定表を次年に適用する能はざるに至らしめ、然も歲々測定を新たにするは其煩到底堪ふ可からず。畢竟如上の個人的感受性決定の困難は「社會の凡ゆる成員は同一の幸福量を享受し得可き資格あり」との前言を、許容するの餘儀無きに至らしむるものであると(Distribution of Wealth, pp. 19-23)

思ふに前叙の如く、各人感受性の平等を前提とせる最大幸福の原理に發足したるトムソンが、考察を富の問題に轉向せる時、究極に於て共產主義に到達せるは固より自然の數である。以爲らく、最大幸福の追求は各人の目的たると共に亦た社會組織の試金石たるものなるが、此目的は享樂の具體的手段たる、富無くしては達成するを得ない。故に幸福に必要不可缺なる條件は、財の豐富なる生產と公正なる分配である。富の生產を豐富ならしむるには、勞働の全收益が其勞働當事者に歸屬す可き「保證」security を必要とする。蓋し此「保證」有るにあらずんば、何人も多量の財を生產すと云ふ苦難多き勞働に從事するを、肯んぜざる可きを以てとある。然し富の潤澤は、それのみにては、最大多量の幸福を招徠するに充分でない。其證左には大不列顛の國民は、富の凡ゆる材料に於て、機械、發明、智慧、產業等に於て、富裕であるに拘らず、依然幸福でない。否寧ろ貧窮と慘禍とは事實生產者の多數の運命である。之を匡正するには須らく豐富なる生產に加ふるに、公正なる分配即ち平等なる分配を以てしなければならぬ。換言すれば、潤澤なる富を少數の掌中に委ぬる事無く之を全人民に頒布し、以て社會の各成員をして、其欲求を滿足するを得せしめねばならぬ。洵に全體は部分よりも大なるが故に、唯だ公正なる分配に依りてのみ、幸福全量の最大を期待し得可しと。

乍併「保證」security と「平等」equality とは、相互に兩立するを得るであらう乎。平等なる分配は、生產を潤澤ならしむる凡ゆる努力を沮喪しないであらう乎。若しも勤勉熟練の徒が怠惰未熟の輩と同額の富を受容するに過ぎずとせば――即ち彼等が其刻苦精勵の成果を享樂するの保證を剝奪せらるとせば――彼等は多量の富を生產する事を歇め、斯くて幸福の獲得を全然不可能と爲さしむるに至らぬであらう乎。此は曾て Bentham の配慮せる所、而して今尙社會主義を論ずる者の、誰しも配慮せざる可からざる所である。そは畢竟社會主義的社會に於ては、人民は私有財產制度の下に於けると同樣の熱心を以て勞働す可きや否やの問題に歸着する。而して周知の如く Bentham は「保證」を以て「平等」よりも重要なりと斷じ、苟くも兩者の抵觸する場合に於ては、平等をこそ拋棄せざる可からず。最も適當なる方策は、先づ社會の基礎を私有財產制度の上に確立し、然る後漸進的改革に依つて平等に接近するに在りと思考した。然るにトムソンは此點に於て Bentham と袂を分ち Owen と同一の軌道を採るのである(Beer: op. cit., pp. 219-220) そは各種各樣の社會組織に關する彼れの批判を通觀すれば、自づから明瞭となるであらう。

四

トムソンは最初其所謂非保證分配制度 System of Insecurity 即ち私有財產制度を基礎とする現存の社會組織、次に其所謂保證分配制度 System of Security 換言すれば勞働全收權を基礎とする社會組織、最後に其所謂平等分配制度 System of Equality 即ち Owen 流の協同的共產社會の各々が夫々異る態樣を通じて富に關聯せる人類の幸福に及ぼす所の影響如何を順次比較檢討する。彼れの見解に依れば現存の社會に於ては分配の不平等は最も著しい。そは暴威と奸譎とに依り、少數者の利益の爲に多數者の富を簒奪する制度である。論證は至極簡單である。即ち凡ゆる富は勞働の所產である。凡ゆる人間は平等なるか若しくは平等に近く、隨つて同量の富を生產する能力がある。然るに事實富は不平等に分配せられてゐる。故に少數の所有者が多數の生產者より、之を刼掠せるに相違無しと云ふのである。而して斯くの如き制度が、功利の原理に照應して甚だ嫌忌す可きものなるは、次の諸理由に依つて明白である。

第一に、トムソンに從へば、現存制度に必然隨伴する「個人の勞働の所產に對する强壓的簒奪は、簒奪者の幸福を增進する以上に、被簒奪者の幸福を減殺する。」加之富が繼續的に一個人の掌中に集積し來る時は、各個の富の幸福增進力は漸次減退する (Disutribtion of Wealth, p. 93) 第二に現存制度は勞働全收權を保證せざるが故に、最も有力なる生產の刺戟を失ひ、隨つて比較的に不生產的である。幸福增進に關する愉快なる希望の代りに窮乏の恐怖が生產の動因たる結果、そは最大の幸福をも招徠せず最大の富をも生產しない。進んで第三にそは富者の專制を現出する。蓋し少數者の掌中に全社會の住居、原料、器具機械、並に土地其物をすら投入するが爲に、是等少數者は互に結束聯盟して政治的權力を把握し、知識教育を獨占し、社會の凡ゆる生產的勞働者に對する報償を、絕對的に左右する權限を收め、更に勞働者の產出する所が辛うじて其通常の生計を營ましむる分量に止まり利潤の名に於て其一部分を富者に貢獻する餘裕無きに於ては、何時にても其勞働を停止し之を飢餓に瀕せしむるの實力を保有するに至る故である (p. 422)。加ふるに多數の遊惰富裕の逸民、及び是に奉仕する所の一層多數の非生產的勞働者を支持する爲に、巨額の國民的所得を浪費せざる可からざる事 (pp. 141-142)。並に一個人の掌中に在る過剩の富は、間々遊戲的に產業を企劃せしめ、而して特定の事業に勞働資本を集中したる後、突如之を解散變更して被傭者を其方途に迷はしむる等の事情は現存制度の禍害を愈々擴大せざれば歇まぬ (p. 156, Lowenthal: Ricardian Socialists, pp. 23-25)。

爰に於てか吾人は去つて他に適良の社會組織を求めねばならぬ。而してトムソンに從へば新社會の理想とする所は、三條の自然的分配法則の圓滿なる發揮であらねばならぬ。第一、凡ゆる勞働は其方向と繼續とに於て自由自發なる可し。第二、凡ゆる勞働の生產物は、其生產者に確保せらる可し。第三、是等生產物の一切の交換は、自由自發なる可しと云ふのが即ち是れである (p. 26)。且つ此三原理の十全なる發現は保證と平等とを併せて招徠す可しと云ふのである。

然らばトムソンは如何なる論據に依り如何なる社會を以て、如上の理想に最適當と看做せりやと云ふに、其 "Distribution of Wealth" の關與する限りに於ては、甚だ曖昧不徹底である。彼れは所謂保證分配制度に基く社會が前揭三原

理を實現す可きを力說し、更に該制度は「自然の事物の許容する限りに於て、生產に最も强烈なる刺衝を與へ、」生產物も資本も共に從前未知なる速度を以て從前未知なる程度に迄增殖蓄積せらる可きを云爲せる一方（p. 175）、其運用に對して尠く共二個の制限を設けざる可からずと思料した。其一は土地鑛山等の如き天與の富にして、そは何人の勞働にも基かざるものなるが故に、須らく萬人に平等に分配せねばならぬ。其二は若し勞働全收を嚴密に實施する時は、勞働を擔當し得ざる老幼は勢ひ保身の道に窮せざる能はず、隨つて社會も亦た倒潰の外無きが故に、假令彼等は社會に何等の勞働を寄與せずと雖、尙是に生存資料を分配せざる可からずと云ふのである（pp. 91-92, 95）。

如上のトムソンの見解は必然一の疑問を誘致する。即ち若しも保證分配の制度が前揭二個の制限を認容するならば、換言すれば天與の富を平等に分配し且つ老幼を扶持する以外は、總て勞働全收權の行使を基礎とするならば、富の社會的配分は平等に接近するや否や。一言以て之を掩へば、「保證」と「平等」とは爰に於て調和す可きや否やの問題である。是に對するトムソンの解答を求むるに、彼れは或る箇所に於ては、「眞の平等的なる「保證」は最大の生產を助成するが故に、亦た可能的最大限度の「平等」に到達せしむるものである――兩者は互に牴觸するものにあらず却つて眞の平等的「保證」を迷はず固執する事に依つてのみ、平等に對する接近を期待し得可きものである」と云ひ（p. 97）、又他の箇所に依ては「個人的競爭に依る勞働の關與する限りに於ては、保證分配は平等分配と調和せしむる能はざるものである」と云ひ（p. 150）人をして適從に惑はしむるものがある。然らばトムソン自身が結局其所謂保證分配制度を棄て、平等分配制度に趣ける論據は那邊に存する乎。

洵に彼れの行論の特色は、經濟理論に立脚して勞働全收權を是非し乍ら、俄然道德的見地より之を排斥せる點に在る。トムソンを以て純「科學的」なりと爲すの論者は、須らく此點に着眼して其謬妄を拂拭す可きである。即ち彼れは平等的「保證」と結合せる自由競爭の制度を以て、生產上にも、分配上にも有利なりと認むるに拘らず、或は尠く共其不利なる所以を認め得ざるに拘らず、實に自由競爭其物の性質に顚蹶す可き弊竇有りとて之を否認するのである。其弊竇とは（一）利己の原理を動因とする事、（二）個人的家族制度の浪費と害惡、（三）個人の心意に委ねられたる判斷力の範圍は自づから限局せらるゝが爲に、個人的活動の樣式は不利なる事、（四）疾病、老年、其他の災禍に備ふる資源の缺如、（五）私有財產制度に基く專制等である（pp. 368-369）。而して是等の禍害を除去し「保證」の利益と共に平等の狀態を現出するには敎育と勸說とに依り Owen 流の協同的共產社會の建設に俟たねばならぬ。曰く「New Lanark の Owen は分配の平等と完全なる「保證」とを如何にして調和す可きかを明示した。相互協同と平等分配、是れ彼れの用ゆる手段である」と（chap. 6. sec. 1）。乍併 Beer の評言の如く尙 "Distribution of Wealth" 執筆の當時に於ては Owen の影響未だ甚だ完たからず、獨立生產者より成る自由、原始的、民主的なる社會と勞働の任意的結合に依る社會主義的社會との裁決に若干躊躇の跡有りしに、Hodgskin の "Labour Defended" が前者を謳歌す可き所以を高調するに及びて、トムソンは決然後者を理想とす可き最後の確信に到達し、乃ち "Labour Rewarded" を現はし

で「假令勞働は其努力に成れる全生産物を獲得するの權利を保證せられざる可からずと雖、尚生産の莫大なる增加並に萬人の享樂を可能ならしめ、併せて凡ゆる事變に對する相互保險を完からしめんが爲に、勞働が其生産に從事する以前に、平等の報償を收受す可き事を任意に協定して不可なるの理有らんや」(Labour Rewarded, p. 37) とて、其決定的態度を表明した (Beer, op. cit., p. 225)。而して現存社會より理想社會に推移する過程に關しては、「强制的平等は自由人に對して何等の典範をも垂示する能はず」(Distribution of Wealth, p. 383)。只管諄々たる說諭と、模範的共産社會の典型を實地に示す事に依りてのみ、全世界に新生命を賦與するを得可しとの、平和的見解を保持せるものである。

以上縷述せる所を要に要約するに、トムソンは先づ富餘り有りて然も貧困普ねき實狀を分配の不平等に歸したる後、功利の原理に照應して富の平等なる分配は、其の生産に支障を來さゞる以上は、理想的制度たる可き所以を立證する。

爰に於て勞働全收權を基礎とする一案は、問題を經濟的範圍に限局する限り、理想に近しとの認定を與へる。蓋し生産方面よりすれば、そは勞働に至極快適なる動因を與ふるが故に最も有利である。次に考案を分配方面に轉向するも、天惠物の平等分配と老幼の扶持とを前提とすれば、格別の支障を發見せぬ。又此勞働全收の制度に如上の兩除外例を設くる以上、其所謂平等分配制度の實質と如何なる差違を生ずるやも、未だ甚だ明瞭でない。唯だ此制度は道德的見地より、斷然排斥せねばならぬ。蓋しそは各人の自由競爭を現前するが故に、利己が行爲の動因となるを以てゞある。依つて畢竟相互扶助の精神に基く Owen 流の協同的共産社會の中に、平等分配制度の實を發揮するのが最善の方途である。而して是に到達する手段としては、暴力を排し、理想社會の典型を實地に示す事に依つて、人々を納得せしめねばならぬと云ふに歸着する。而して如上の思索の過程の中には多量の空想的分子を包含するが故に、吾人は到底 Menger の如くトムソンを以て「科學的社會主義の最も顯著なる建設者」と爲すの說には、讃同する能はざるものなりと雖、尚社會主義思想史上に於る彼れの地位を適確に闡明するには、前叙の根本思想が果して幾許の程度にまで其經濟學的理論と連繫せるかを、吟味するの必要がある。

五

トムソンの經濟學說の根幹は所詮リカアドオの勞働價値說に由來する。曰く「富は勞働の所産である。總て欲望の對象を富と化する所の分子は、勞働以外には有り得ない。勞働は富の獨特の性徵たると共に、亦た其唯一の普遍的尺度である――勞働こそは唯一の富の父である」(Distribution of Wealth, pp. 6-7)。但價値を形成する勞働には、啻に過去に於て消費せられたる勞働のみならず、亦た未來に於て節約せらる可き勞働をも包含する「沙漠の國に於る井泉は富である。固より井泉は、謂はゞ自然の所産なるが故に、之を作るに毫も勞働を必要とせず、且つ又水を汲出す勞働のみが評價せらる可きものでも無い。乍併井泉が其箇所に存在する事は、若し是れ無くんば最寄りの場所より水を搬出し來るに必要なる勞働を節約する。而して此井泉の價値は、斯く節約せられたる勞働の分量に依り測定す可きものである」(p. 9)。

然らばトムソンは、純眞なる勞働價値說を以て一貫せりやと云ふに、然らず。彼れは勞働を以て成る程富の唯一普遍的なる尺度と爲すも、

然も精確なる尺度にはあらずと主張する。而して其精確ならざる所以は、「欲望は變化し易く」且つ勞働は欲望の精確なる準繩たる能はざるが故であると云ふのである(p. 15, 16)。換言すれば彼れは勞働價値說の觀念と、是と相容れざる主觀的價値說の觀念とを交々包有せるものである。爰に於てか兩者の調和を試みて云ふ、例へば遊園地の如く「自然が貨物の供給を制限せるが爲に勞働が欲望の要求を充たす能はざるものに於ては、叢氣 caprice に依つて決定せらるゝ人爲的價値を發生する——然し叢氣の決定する價値は是と類似の貨物を生產するに必要なる勞働の分量に依りて制限せられ、且つ此程度に上る事稀である」(pp. 14-15) と。而して嗜好品と稀少品とを除外する時は、多數の自由に生產し得可き財をのみ存し、是等に對しては、靜的社會狀態に於ては、勞働は精確なる尺度である。

即ち「特定の期間に於る、特定の欲望を保持せる、特定の社會狀態に於ては、欲望の目的物を產出する爲に雇傭せられたる通常の熟練並に判斷を具備する所の勞働が、彼等の價値の唯一の尺度であり、且つ斯かる事情の下に於ては精確なる尺度である」と云ふのである (p. 16)

今如上のトムソンの價値論を以てリカアドオの夫れと對比するに、勞働價値の觀念を根本とする點に於ては兩者は即ち一なるも、其派生的見解に於て看過す可からざる二個の相違がある。其一は固よりリカアドオも勞働に依りて自由に複製し能はざる貨物を全然勞働價値說の觀念より除外したるに、トムソンは一旦除外したる如上の貨物を再び誘致して、是と「類似せる貨物」の價値と對比せしめたるに依り、其價値論をして拾收す可からざる紛糾に陷らしめた。其二はリカアドオは後に其勞働價値說の原始的態樣を修正して、更に勞働の成果が市場に賣出さるゝ迄に經過する時間の長短が、其相對的價値に關係するの理を追加せるに、トムソンは全然之を閑却した。畢竟彼れは拋棄す可きものを拋棄せず、追加す可きものを追加しなかつたのである。論者或は社會主義經濟學說を其發端に於て邪路に致せるの因リカアドオの價値論に在りと爲す者有れども、吾人は其是れ有る所以は、相傳者の罪にあらずして寧ろ繼承者の罪にあらざるかを疑ふものである。

勞銀に關する考察は "Labour Rewarded" に稍明細である。彼れは先づ現在勞銀率が如何なる作用に依りて決定せらるゝかを探求し、畢竟「需要供給の比例」なる一語に要約せらるゝ所の、偶發的諸事情の變化に基くとの結論に到達する (Labour Rewarded, p. 23)。問題は如何に在る乎より如何に在る可き乎に移らねばならぬ。爰に於て彼れは、一部論客の提案たる功績に準ずる分配は、不可にして且不能なりと考へる。熟練優秀の勞働を遂行するに依つて感ずる幸福其物が、既に充分なる報償である。況や文明の第一義は、適者の產出にあらずして、不適者の非運を緩和する事に存するのである。然るに功績に準じて差等を附するは、是れ或る意味に於て、弱者を犧牲に供して强者に倖するものである。更にそは强壓的法律を背景とするにあらずんば、支持するを得ない。蓋し自由競爭の制度は、斯かる手段に基く勞銀の決定を妨碍す可きを以てゞある。最後に個人的勞働の貢獻を適確に測定するの不可能なる一事は、斯かる提案を無用とするものである (Ibid. pp. 19-20, 29) 畢竟此問題を解決するは、此問題を拋擲するに在る。乍併個人的には不可能なる事も集團的には可能である (Ibid. p. 36)。卽ち各個人の生產せ

る分量にして決定するを得ざる以上は、勞銀は勞働の平均生産力に準じて總ての人々に平等に與ふるに如かず、且つ此平等分配の制度は生産以前に於る勞働者の任意協定に依つて開始す可しと云ふのである（Lowenthal; op. cit., pp. 33-35）。但既述の如く"Distribution of Wealth"に於ては、未だ原始的自由競爭の社會と協同的共産社會との採決に躊躇し、隨つて前叙の徹底的意見を抱懷したりと云ふを得ず、殊に功績に準ずる分配制度、即ち勞働全收權に基く分配制度を忌避して平等分配制度に趣ける動機は經濟學上の理論に存せずして、道德的見地に發するものなるを、吾人は反覆牢記せねばならぬ。

勞銀以外の所得は、トムソンに從へば、搾取の結果である。そは利潤と地代の名に於て行はれ、尠く共勞働生産物の半數を占めてゐる（Distribution of Wealth, p. 166）。「此利潤の源泉は是れに投費せられたる熟練勞働に依つて、粗生原料に對して加へられたる價値以外には有り得ない。原料、建物、機械、勞銀等は、彼等自身の價値に毫釐をも加ふるを得ない。增加價値は唯だ勞働よりのみ發生する」（p. 127）。然し又以爲らく、機械、原料等の形態に於る資本有るにあらざれば、獨り勞働のみにても生産上無力である。故に勞働者は、不幸にして彼れ自身資本を所有せざる時は、其使用に對して當然報償を拂はねばならぬ。爰に於てか問題は其幾何を支拂ふ可きかに歸着する。之を資本家に問へば答へて曰く「そは機械其他の資本の使用の結果、同量の勞働に依つて産出せられたる增加價値である。斯かる餘剩價値の全部は資本を蓄積して之を、若しくは其使用を、勞働者に前貸する所の優秀なる手腕才智に酬ゆる爲、資本家に歸屬す可きものである」と。之を勞働者に問へば答へて曰く「そは生産に消耗せられたる資本の失費を償却し、加ふるに其所有者並に管理者をして、比較的熱心に生産に從事せる勞働者と、同等の安樂を享得せしむるに足る丈けの額である」と（p. 167）。

吾人は此トムソンの陳述に歷然たる矛盾の存ずる事を認めねばならぬ。即ち勞働の爲に辯ずるに當りてや、彼れは資本を以て毫も新たなる價値を産出するものにあらず、增加價値を生産するは勞働にして、資本は唯だ其消耗額のみが新商品に入るのであると主張する。此はリカアドオの意見に合致する。然るに一方資本家の爲に辯ずるに及び、彼れは餘剩價値即ち新價値を産出するは機械である。換言すれば、勞働のみにては常に特定の最少限を生産するに過ぎず、夥多の富は資本が生産するのであると論述する。若し此後說にしてトムソン自身の見解なりとせば、彼れは毫も勞働生産物の不正なる掠奪を抗議す可き理由を持たぬ。蓋し此場合、資本は唯だ其生産せる所を取るに過ぎざる故である。此岐路に於てトムソンの當然爲す可き所は、全問題を經濟學的根據より考察し、勞資兩主張の孰れが經濟學の純理並に歷史に適合するかを論斷す可きであつた。然るに彼れは秋毫も之を企つる事無く、再び功利の原理に立返つて曰く、「勞働者が其生産力を發揮するを得るに必要なる資本の使用に對して、支拂ふ可き所の額は、前揭勞資兩主張に從つて莫大なる相違がある。そは殆んど完全なる平等と、貧富の極端なる分裂との間に存する相違である。此拮抗せる要求に對し、正義は如何に論じ功利は如何に斷ずるや。」若し勞働者の提案にして普及せば富は迅速に增加するであらう。蓋し生産的勞働者は、其勞働の全所産を獲得するが故に、最大の熱心を以て勞働に從事する爲である。富は斯くて多數

の上に分布し、爲に最大多數の最大幸福に對する機會を作り、社會は略ぼ其目標に到達するであらう。是に反して、資本家の提案が普及する時は、極端なる不平等が發生するであらう。際限無き富の誘惑と社會衆民に對する優越感に刺戟せられて、彼れは專制者と化するであらう。不平等の害惡は其極限に達するであらう。幸福は其最低水準に沈淪するであらう。如何となれば第一に、極端なる不平等は最大多數者の幸福を奪ふに依り、享樂の總和を減少せしめる。第二にそは正比例的に富者の幸福を增加しない。蓋し吾人の必要及び欲望を充足するには僅に富の一定部分をのみ必要とし、此從前の富に對する追加部分の各々は、假令同價値を有するとも、吾人の幸福を增加する程度は愈々減少するからである。極端なる不平等は、極端に富裕なる者の間に、積極的諸罪惡を發生し、而して此罪惡を爾餘の人民間に傳播する。そは能率高き生産の刺戟を減退する。そは主として懶惰富裕なる者の驕氣と享樂に迎合する爲の、無益なる技術や職業を奬勵する。最後にそは必然富者を援護する以外に自から何等の資格をも有せざる徒輩に依つて、立法司法行政の三權を横領せらるゝに至るのである。故に畢竟功利と正義の見地に依つて、勞働者側の提案を普及せしめねばならぬ」と（Beer: Histryo of British Socialism, vol. I, pp. 223-224）。見る可し、爰に於ても亦た最後の裁斷を下せる論據は、經濟學上の純理にあらずして道德的見地に基けるものである。

轉じてトムソンの社會政策上の見解を窺ふに、彼れは當時論議の焦點と成れる三個の問題に關して、簡單なる、乍併力强き批判を下してゐる。第一は人口問題、第二は穀物條例問題、第三は勞働組合問題である。

六

既にトムソンにして Owen 流の共産社會を理想とする以上は、總ての社會主義の行途に於る一大暗礁として提示せられし Maithus 派の人口論を、閑却する能はざるは固より其所である。乍併此問題に關しても亦た、其 "Distribution of Wealth" と "Labour Rewarded" との間には、看過し難き矛盾がある。即ち前著に於ては、勞働階級の人口過剩が常に勞銀の低下に終ると云ふ現象は、「現在の知識狀態に於ては、物理的には可能なるも道德的には不可能である」（Distribution of Wealth, P. 423）との見解を披瀝し乍ら、其後著に於ては人口調節の至難なる所以を列擧し、（一）假令人口の抑制が實現せらるゝ共、そは勞働者を救助せざる可し、蓋し或る勞働者の團體が其增殖を抑制するとも、彼等の階級は抑制を行はざる團體の人員に依りて充たさる可きが故である。（二）假令總ての熟練勞働者の團體が、其增殖を抑制するとも、彼等の階級は不熟練勞働者の團體に依りて充たさる可し。（三）假令大不列顚の總ての勞働者が抑制を行ふとも、彼等の階級は勞銀低廉なる他國民に依つて充たさる可し。（四）若し異邦人を除外するとすれば、自由貿易の原理は破れ、暴力と詐欺との凡ゆる害惡を人類に及ぼすであらう。故に結局人口を制限し勞働の供給を調節するは不可能である。假に之を可能なりとするも、二個の新害惡が發生するであらう。即ち資本は低廉なる勞働の存在する國に移動するの傾向を促し、本國に於る人口制限を徒爾に終らしめるであらう。更に低廉なる勞働の所産たる外國品の競爭は內國市場を脅威するであらう」と述べてゐる（Labour Rewarded, pp. 69-74）。即ち彼れは一方に於て人口過剩を想像し難しと說き乍ら、他方に

於て現存狀態に在りては人口制限の不可能なるを歎ずるものである。畢竟彼れは現存狀態に對する駁擊としては、他の改造論者の提案に應同意を表すれども、之を以て自己の提案と比較する時は、其不完全を非難する所の論客である。人口制限に依る改良案に對する所の、トムソン自身の最後の態度は、そは最善に解するも所詮消極的なりと云ふに歸着する。そは勞働者に對し勞働生産物の全收を約束する事無く、唯だ貧困の最惡の禍害を回避するに過ぎぬ。一方共産主義的社會に於ては、輿論に基く知識の普及と理性的行爲は、此禍害の發現をして想像し能はざるものと爲す可しと云ふのである（Practical Directions, p. 230, Lowenthal: Ricardian Socialists, p. 39）。其結論の空想的精神改造論に墮せるは、新たに喋々を要しない。

穀物條例に關する紛紜は、トムソンに從へば、畢竟資本家のみの問題である。該條例を廢止すれば「生産は增加し、若しくは退歩より免るゝかも知れぬ。然し其生産物の分配に至つては、分配原理其物が依然同一なるを以て、其相違は唯だ活社會の騷擾を一層大ならしめるに過ぎぬ。換言すれば一層多量の貨物が一層多數の勤勉者に依つて彼方此方に運搬せられ且つ比較的多數の非享樂的怠惰者に依つて消費せらるゝに過ぎぬ」と論じ去つてゐる（Labour Rewarded, p. 58）。

最後に勞働組合に關しては、それ自體のみには甚だ不滿なれども、其窮極目的たる協同主義への一つの道として、トムソンは若干の意義を認めてゐる。以爲らく、勞働組合は失業者を救濟するを得可く、傭主の叢氣並に專横に對する制限たるを得可く、勞銀を昇騰し利潤を低下するを得るであらう。加之そは勞働階級の智的能力を完全に發揮する傾向を促すであらう。蓋し報償に關する諸問題は、從來勞働者等が其眼界の及ばざる所と思惟したる、經濟學、統計學、法制、道德哲學等と密接に關聯せる故である。最後にそは勞働者を驅つて、凡ゆる彼等の方策は彼等に其勞働の全生産物を確保するに不適當なる所以を發見せしめ、それ故に彼等は協同主義の經濟學の敎義を研究するの餘儀無きに至るであらう。斯くて勞働組合は勞働階級の勞銀並に智的道德的水準を向上せしむる事に於て、其企及し得る所を必ず成就するであらう。爰に於てか彼等は、其節約せる基金を以て眞の地位回復の事業に着手し、先づ彼等自身の組合製作場を建設するであらう――斯くてトムソンは其明細なる組織を詳述せる後更に曰く――乍併勞働階級をして、假令如上の組合製作場が産業の凡ゆる部門に設置せられたりと想定するも、尙且つ資本主義制度の桎梏より勞働者を解放す可しと思惟せしめてはならぬ。如何となれば彼等は依然其建物の立てる土地に對して地代を、更に其使用する原料に對して利潤を、支拂ふの義務を負ひ、又依然其賣買取引に於て、資本家の經營に懸る同業の敵對、一般市場の變動等の、凡ゆる競爭上の不安に曝されるであらう。爰に於てか是等の組合制作場に所屬せる勞働者等は、更に一歩を進めたる方策に依據し、土地を買收し、農業組合を組織し、而して最後に彼等相互の欲望に應ずる協同的生産の社會を形成する必要を發見するに至るであらう。勞働の進歩の道程は、勞働組合より、知識と道德的精神を通じて、相互協同に至るに在りと（Labour Rewarded, pp. 87-93, Beer: op. cit. pp. 225-227）。

斯くて幾多の紆餘曲折を經たるトムソンの思索の過程は、一八三〇年 "Practical Direction

for the Establishment of Communities" なる題下に協同主義の綱領を說くに及んで、其當に歸趨す可き極地に到達した。「勞働階級に對する職業の缺乏乃至不安定は、是れ現存社會の禍害の根幹である。職業の缺乏を直接惹起するものは何ぞや。賣捌き即ち市場の缺乏である。貨物の生產せられたる時、之を全然賣却し能はざるか若しくは生產費を償ふ可き價格に於て賣却し能はざる故に、工業家は永久的なる、且つ利得有る職業を與ふるを得ないのである。匡救の道は明に、凡ゆる種類の有益なる生產物に對して確固たる市場を發見するに在る。協同的產業組織は之を實現する其方途は、全世界の外國市場を無用に穿鑿して、結局到る處に餓死に瀕せる生產者等の絕えざる競爭の橫溢せるに啞然たるが如き事無く、適宜の員數より成る勞働階級の任意の結合に依り、相互の爲に協力する事に依つて相互の爲に市場を供給するのである。換言すれば、衣食住の如き最も緊要缺く可からざるものゝ總てを、彼等自身が直接相互に供給し合ふのである」との一節は、彼れの所謂利己を行爲の動源とせる經濟學に代位す可き、協同主義の本旨に準據せる新社會科學の原理を窺知せしめ、其理想社會の窮極を表示せるものである。

トムソンの敎義の大綱は、略ぼ以上に盡きる。次節に於ては其社會思想史上に於る地位に關して、總括的考察を試みるであらう。

七

凡そ時を同じうする者の間に於ては、互に相關知する所無くして、自づから共通類似の思想を釀成する事有る可きが故に、一思想家の思想の淵源を適確に究明するは屢々難中の難事なれども、トムソンの場合に於ては公然二人の啓示を明言せるが故に問題は比較的簡單である。そは云ふまでも無く Bentham 及び Owen に外ならぬ。而して何が故に彼れが、此全然相背馳せる兩思想家の各々と共鳴するに至りしかは、既に一言せる所である。即ち彼れは Bentham の功利主義的倫理觀には聽從すれども、其政治的急進主義には到底不滿を禁じ得ない。凡ゆる政治的急進主義は其學說に於ては徹底的自由論を主張する。一切の政府は强壓なりと思料する。然し實際問題に於ては彼等の自由論は、畢竟保守政策に對する反抗を意味せるに過ぎぬ。然るに協同的社會主義者は、反政府の信條を完全に遵奉する。此兩者各々の國家乃至政府に對する態度の相違は、分配に關する夫々の見解に重大なる軒輊を惹起した。即ち Bntham は保證制度換言すれば私有財產を重要視して、生產手段の所有者に地代利子利潤を保證す可く、分配を管理す可き政府の法律を要求せるにトムソンは Owen に學びて平等を尊重し、政府の法律を否して分配の自然的法則を追求した。斯くてトムソンに於ては寸毫の矛盾無く Bentham の理想を Owen の社會に實現せんと企圖せるものである（Beer: op. cit. p. 220）。

乍併若し彼れにして是より一步を進め得ざりしとせば、敢て前代の空想的社會主義者と何等の撰ぶ所が無かつたであらう。然るに彼れが社會思想の發達史上特異の地位を占據し得たる所以のものは、假令不徹底不完全なるにもせよ、其理想を或る程度まで經濟學的理論の上に支持せんと試みたるに依る。固より吾人が反覆究明せるが如くに、彼れは屢々其行論の半途に於て經濟學的推理を拋擲し、最後の裁決を道德的見地に依つて論斷した。然し兎も有れ彼れがリカアドオの價値論を中心とせる資本主義經濟學の學理を借りて、是れが社會主義的應用を企圖せ

る所に、重要なる意義は存するのである。吾人は必ずしも彼れの思索の矛盾撞着を糺彈するの要有るを見ない。前人未蹈の境地に突入する者の屢々迷路に彷徨す可きは、固より其所である。唯だ其吾れより古を爲すの氣慨有りてこそ、假令自からを泥土に委して敢て著聞する所無きも、後に到る者の進路をして平明ならしむる尊き犧牲者の使命は足る。且つ夫れ Foxwell は曰く「トムソンの榮譽は Owen 流の協同主義の高唱にあらずして、實に彼れが富の公正なる分配の問題を提起し、之をして爾後の英國經濟學中に重要なる地位を獲保せしめたる第一人者たるに在り」と（Introduction to Menger's "Right to Whole Produce of Labour, p. xlvii）。吾人は是れに讃同するを辭せざるものである。

然し他方に於てトムソンを激賞するの餘り、Menger の如く彼れを以て「科學的社會主義の眞正なる建設者」と爲すが如きは、又偏見の甚しきものとして極力排斥しなければならぬ。既に Menger 自からも謂へらく「新秩序の下に於ては人類が全然別個の行爲動源より活動す可しと期待する者、換言すれば吾人の現在の狀態とは異る因果の關係を想像する者は、是れ非科學的空想に過ぎざるのみ」と（Menger: op. cit. p. iii）。今之を以つてトムソンが其 "Labour Rewarded" の自序に聲明せる、「本書の目的とする所は富の生產蓄積分配に關する現存社會の原理を一變し、一層普遍的なる安樂と幸福に資す可き、新たなる行爲の原理を代位せしむるに在り」との言辭と彼此對照する時は、蓋し思半ばに過ぐるものがあるであらう。而して彼れがリカアドオの價値論に發足して餘剩價値の觀念を披瀝するに至りしは、固より其功績の至大なるものなりと雖、之を以てマルクス一派の社會主義に於る餘剩價値論の地位と對比するに、其間自から霄壤の杆格がある。エングルスは這般の眞相に言及して曰く「リカアドオの學說を應用して勞働者に對し、社會の全生產物は彼等の勞働の所產なるが故に當然彼等の所有とす可きを明示するは、直接共產主義に導く事必定である。然しそは同時にマルクスの示せる如く、經濟學上より論ずれば形態の誤れるものである。如何となればそは單に經濟に道德を適用するに外ならざるを以てである。資本主義經濟學の法則に從へば、生產物の大部分は之を創造せる勞働者に歸屬する事無し。かるが故に若し吾人が「そは不正なり、そは失當なり」と言ふに於ては、そは何等經濟學と交涉を保つものにあらず、吾人は唯だ此經濟事象が吾人の道德的情操に背反せるを云爲するのみである。是れマルサスが之を以て其共產主義的結論の基礎と爲さず、却つて日常吾人の眼前に展開せる資本主義經濟組織の必然的崩潰を論據としたる所以である」と（Engel's Preface to Marx's "The Poverty of Philosophy, Kerr's ed. p. 14）。

吾人は社會主義經濟學の聖典と稱せらるゝマルクスの資本論が漸く新約全書たるの權威を失墜して、將に舊約全書たる地位に敬遠せられんとする大勢を馴致せる今日、尙且つ其祖述者協翼著並に追隨者の自讃するが如き意義に於る、「科學的」なる名辭に相當するや否やを知らずと雖、少く共トムソンの思想が其根柢に於て彼等と相容れざる分子を包有するの一事は、安んじて明言し得る所である。要之トムソンは前代の放縱なる空想的社會主義に顯然數歩を進むると共に、尙所謂科學的社會主義を去る事甚だ遙遠にして、畢竟前者より後者に移る轉期に於て、重要なる役目を演ぜしものと見る可きである。而

して此觀察は一般に之をリカアドオ派社會主義の總ての人々に擴充するを得可く、就中其思想の最もトムソンに近似せるは John Gray である。（未完）。

自由主義以前

榎本鑛治

一

抑も近代の國家は、比類稀なる文明開化の特殊的産物である。乍併此の産物は今尙ほ形成の途上にあつて、其の過程の一部は社會秩序の新舊二原理間に於ける一の鬪爭に外ならない。依て今私は、其の新原理――玆には專ら自由主義(liberalism)を指す――を理解する便法として、舊原理に就て、即ち過去の社會組織は如何なるものなりしやに就て一瞥を與へることゝする。

右の舊社會組織は、專ら自由主義的觀念の流行と共に、徐々ながらも確實に市民的國家(civic state)と云ふ新組織に其の地位を讓りつゝあるのである。然らば之よりも古き社會組織は原始的(primitive)であるかと云ふに、決して然らず。眞に原始的なる社會組織に就ては、容易く物語り得るものではない。併し唯だ斯う云ふ事丈けは明言し得る。即ち人は凡ゆる時代を通じて社會に生活し、而して血族關係と單純なる近隣關係との離る可らざる情實(ties of Kinship and of simple neighbourhood)が、社會組織の凡ゆる形態の基調をなして居るのである。唯だ最も單純なる社會に於て斯の如き情實關係は、宗教や其の他の信仰に依て强固にされ擴大されて、遂には非常な價値を有する唯一の關係となるらしい。又事實上子孫と云ふ經（タテイト）と、雜婚と云ふ緯（ヨコイト）と(warp of descent and the woof of intermarriage)

よりして一種の組織(a tissue)が織り出され、斯くて此の組織より、少數にして單純ではあるが、緊密なる社會が出來上るのである。乍併血族關係と近隣關係との離る可らざる情實は、唯だ狹小なる地域内に於て有效なのである。故に地方團體、氏族、村落共産團體等(the local group, the clan, or the village community)は往々有力なる生活の中心であるが、これに反して種族(the tribe)の大聚合體も軍事的組織を其の根柢とせざる限り、眞の社會的且政治的統一(social and political unity)の目的を達成することは、殆んど出來ないのである。併し軍事的組織は、單に同一種族を團結せしめるのみならず、又他の種族を征服せしめるに役立ち、夫れがために原始的社會に取ては頗る過大なる負擔であるにも拘はらず、多額の費用を投じてより强大なる且より秩序ある社會を建設するに努めるものである。

然らば斯の如き秩序が一度建設された場合には、其の社會は何に基づいて支配せられるかと云ふに、所謂暴力(naked force)などを用ひないことは云ふ迄もない。即ち其の支配者となる人は、神聖不可侵の權威(a sacrosant authority)を把持するものである。恐らく其の支配者は、神か神の後裔かであるのであらう。或は彼等は一個の自立の僧侶たること(an independent priesthood)に依て淸淨化され、又崇高に見られるのかも知れない。何れにしても彼等は單に配下の肉體のみならず、又心意をも支配する程に絶大なる權力を有して居るのである。彼等支配者は、僧職授任式(ordination)を取極めるが故に、神に依て聖職に任命されて居る譯になる。從て斯る政府は當然其の人民を嫌ふこともなければ、又彼等に冷淡を裝ひもしないのである。即ちそは